

导 读

导 入

《谦斋医学讲稿》是秦老自一九五七年至一九六四年8年期间，先后在北京、上海、天津、西安和吉林等地的部分学术报告讲稿，有些文章曾在全国各地杂志上发表过，汇集时作了少量删改和补充。

《謙齋医学講稿（謙虚な部屋の医学の原稿）》は秦老師 1957 年から 1964 年まで 8 年間の時のもので、相前後して北京、上海、天津、西安と吉林などの地方の学術原稿を報告し、多少文章は全国各地の雑誌の上で発表したことがある、集まるいくつかの文章は、各地で発表したものから集め添削した。

早在一九六九年十二月二十六日，他临终前，曾在给我们的书信中，语重心长地写道：“《谦斋医学讲稿》对于中医作了初步的批判继承，可以代表我的学术思想，望好好研究一下……”

1969 年の 12 月 26 日に、彼が臨終になる前に、私がいただいた書簡がある中で、心を込めて書く：“《謙齋医学講稿》は漢方医について初歩的な批判の継承を行い、私の学術の思想を代表することができ、さらによく検討することを望むものである……”

为此，我们根据秦老生前及遗信中所示，现将秦老在报刊、杂志发表过或未发表而讲述过的具有代表性的学术论文和见解独到的文章，收编进来，做为《谦斋医学讲稿》的增补。以供学习。

このために、私は秦老師からの生前の遺信である手紙の中で示して、現在秦老師を新聞雑誌、雑誌で述べたことや未発表で代表的な学術論文と見解の独特な文章を改編し納め入れ、《謙齋医学講稿》の補充を行った。もって学習に供えるものである。

全书可从四个方面去学习。

全書は4つの部分から学習することができる。

一、秦老主张学习祖国医学，首先应当努力学习经典著作，认真钻研基本理论，扎扎实实地打好基本功，深入掌握中医理论的精髓。

一、秦老師の祖国医学の学習は、まず努力して古典的著作を学ぶべきで、真剣に基本理論を研究し、着実に基礎的な訓練を作りあげることによって、深く人は漢方医の理論の精髓を掌握することができる。

《讲稿》一开始就提出了中医理论中两个重要的问题：“脏腑发病及用药法则提要”和“五行学说在临床上的具体运用”。

《講稿（原稿）》では漢方医の理論の中で2つの重要な問題を出した：“臓腑が発病するおよび用薬の法則の要約”と“五行学説の臨床上的具体的な運用”である。

秦老认为中医的理论核心是脏腑的辨证。

秦老師は漢方医の理論核心は臓腑弁証法だと思っている。

五行学说是中医分析病情时的思想方法，是中医最重要的基本理论之一。

五行学説は中医の病状の時に分析をする方法で、中医の最も重要な基本理論中の一つである。

秦老在详尽阐述了《内经》及前人对脏腑辨证和五行学说的论述之后谈了自己的认识。

秦老師は詳しく《内経》と先人の臓腑弁証法と五行学説との論述に対して詳しく述べた後で自分の認識を話している。

他说《内经》中明确指出脏腑的生理、病理及与形体的关系。

彼の説は《内経》中で明確に臓腑の生理、病理および形体との関係を指摘すると言っている。

如：五脏所主，五脏开窍，五脏化液，五脏所恶等。

例えば：五臓のつかさどる所は、五臓開竅、五臓液に化す、五臓は悪む所などである。

在脏腑用药方面，李时珍在《本草纲目》的序例泻”，“脏腑虚实标本用药式”及“本草分经审治”，都是说明用药必须以脏腑为纲，根据脏腑病变而使用。

臟腑の用薬の方面で、李時珍の《本草綱目》での序の例は瀉”，“臟腑虚実標本用薬式”と“本草分経審治”、すべての用薬は必ず臟腑を綱にしなければならないと説明し、臟腑の病理変化によって使うのを根拠にしている。

秦老师说，探讨脏腑用药，首先要明确脏腑发病的基本概念，结合药物的气味、效能和归经，针对发病病位、病因、病证得出用药的法则。

秦老師は、臟腑の用薬を探求して、まず臟腑の発病する基本概念を明確にし、薬物の気味、効能と帰経、発病する疾病位、病因、病証に対して用薬の法則を得ると説いている。

例如：肝—肝藏血、血为体、气为用、性升发、主条达，又肝主筋、开窍于目、爪为筋之余，肝之经脉循胁肋，走少腹络阴器，肝恶风，怒伤肝，与胆相表里，在女子为先天等等。

例えば：肝—肝は藏血、血は体となし、気は用たり、性は昇発で、条達を主る。また肝は主な筋を主り、目に開竅し、爪は筋のあまりで、肝の経脈は脇肋を循り、少腹を走り陰器に絡（まとう）。肝は風を悪み、怒れば陰を傷る。胆と表裏をなし、女子にあつては先天などを為す等がある。

据此而定出补血、和血、理气、舒肝、清肝、温肝、鎮肝等等治法和药物。

そのために補血、和血、理気、舒肝、清肝、温肝、鎮肝などを出すなどの治法と薬物等を定める。

在谈到五行学说时，秦老师说，应先掌握生、克、母、子等基本知识，必须结合临床实际去研究，只有结合临床去谈中医的理论才能使人觉得深刻，才能使人懂得其中道理，不应给人以“玄学”的感觉。

五行の学説に言及する時、秦老師は、先ず生、剋、母、子などの基本知識を掌握し、必ず臨床に結びつけ実際に研究を行なわなければならない、ただ臨床に結合をして中医の理論の才能が人に深刻と感じさせることを話し、そうして人をその中の道理にわからせ、人に“玄学”の感覚をもって応ずべきでないと言う。

他又说，临床上具体运用五行学说必须以脏腑为基础，因为医学上既然将五行分属五脏，所以在临床运用上就不能离开五脏来谈五行，只有把脏腑辨证积五行学说有机地联系起来，才能说明中医有自己完整的理论体系。

彼はさらに言う。臨床上で具体的に五行学説を運用して必ず臓腑を基礎にし、医学上、五行を属の五臓に分け、臨床運用上で五臓を離れて五行を談することができなくても、臓腑弁証に五行学説を結び付け、そうしてこそは中医が自分の完備している理論の体系があると。

经验来自于实践，理论又是许多经验的总结，反过来理论又指导着实践。

経験は実践でから来て、理論はまたたくさんの経験の総括をし、逆に理論はまた実践を指導している。

秦老重视理论的学习，更强调应与实践相结合，并不断地总结经验，发展理论。

秦老師は理論の学習を重視して、更に実行して互いに結合することとに依じて強調し、そして絶えず経験を総括し、理論に発展している。

例如，他在“水肿病的基本治法及其运用”一文里，首先指出《内经》里与水肿病有关的脏腑生理功能：肺主皮毛，宣肺发汗使水邪外出；膀胱司小便，为水湿的出路；脾主化湿；肾为水脏又有命火；大肠传导糟粕，也是水的出路；三焦自肾上连于肺，主气，司决渎等理论。

例えば、彼は“水腫病の基本的な治法及び運用する”の1文の中で、まず《内経》の中に水腫病と関係がある臓腑の生理機能を指摘している：肺が主る皮毛、宣肺発汗は水邪を外出させる；膀胱は小便を司り、水湿の出路である；脾は化湿を主る；腎は水臓のためにまた命火がある；大腸は伝導糟粕、水の出路；三焦は腎より上の肺に連なり、気を主る、決溝を司どる等の理論である。

P 5

从而提出发汗、利尿、燥湿、温化、逐水、理气等六个治疗水肿病的基本治法，运用到临床上取得了非常好的疗效。

それによって発汗、利尿、燥湿、温化、逐水、理気などの6つの水腫病治療の基本的な治法を出し、運用して臨床上とても良い療効を得た。

二、在提倡学习基本理论的同时，应博览群书，吸取各家之长，只有多知博学才能去伪存真，去芜取精。

二、学習の基本理論を提唱する同時に、広くいろいろな書物を読むべきで、各家の長さを吸収し、ただ多く博学を知りそうしてこそが偽物を除去し本物を残すことができ、雑を除き精を取るべきである。

在《谦斋医学讲稿》的全书中据不完全统计，除《内经》、《伤寒论》等经典著作以外，他共引用了近60部医学书籍的内容、30多位前人的论述作为他自己阐述问题的依据。

《謙齋医学講稿》の全書の中で概算統計によると、《内经》、《傷寒論》などの古典的著作以外、彼は共に60部近くの医学の書籍の内容、30数名の先人の論述を引用して彼の自分の詳しい陳述の問題の根拠のためにしている。

例如：在《论肝病》一文的第五节中，他竟举出《本草求真》、《本草分经审治》、《本草从新》、《本草疏证》、《本草纲目》、《日华本草》、《大明本草》等12部本草书籍中的记载讲述了肝病常用药的分类。

例えば：《論肝病》1文の第5節中で、彼は意外にも《本草求真》、《本草分経審治》、《本草從新》、《本草疏証》、《本草綱目》、《日華本草》、《大明本草》などの12部の本草經の書籍中の記録を挙げて肝病の常用薬の分類を述べた。

在《痛证的治疗》一文中，他引用李东垣、朱肱、朱丹溪、尤在涇、王肯堂等七位医家的见解论述了“头痛”病。

《痛証的治療》1文の中で、彼は李東垣、朱肱、朱丹溪、尤在涇、王肯堂などの7名の医家の見解を引用して“頭痛”の疾病を論述した。

如李东垣说：“巅顶之上，惟风可到”；朱肱认为“三陽有头痛，三阴则无”；朱丹溪认为“头痛多主于痰，痛甚者火多”；王肯堂说：“浅而近者名头痛，其痛猝然而至，易于解散速安”；尤在涇说：“风热上甚，头痛不已，如鸟巢高巔，宜射而去之”……。

たとえば李東垣が言う：‘山頂は上を突いて、ただ風は着くことができる’；朱肱は“三陽に頭痛があるが、三陰はない”；朱丹溪は“頭痛が多く痰で主り、痛み甚しき者は火が多い”；王肯堂は言う：“浅くて近い者は頭痛と名づけ、その痛みは突然至って、速く安に解散しやすい”；尤在涇は言う：“風熱は上ること甚だしく、頭痛の已（おわ）らざるは、鳥の巢の高巔のようだ、射ってこれを去るべきと”……。

秦老集各家之长，舍诸家之短而后总结说：外感头痛是外邪引起，当治以辛散为主；病位在头，应选轻扬之品；疏散风邪，佐以缓痛，兼谓头目，为本病的治疗原列。

秦老師は長を各家に集まめ、諸家の短を捨ててしかる後総結して言う：外感の頭痛、是の外邪は引き起こし、辛散を主として治療する；病位は頭なので、軽く揚がる品を選用すべきである；風邪を疏散し、緩い痛みを助けて、兼ねて頭目と言ひ、本病の治癒原則となす。

临床常用菊花茶调散随症加减。

臨床常用では菊花茶調散を症に随って加減する。

秦老不但博采前人的经验，对于西医的知识也在不断地探索。

秦老師は先人の経験を幅広く講じるだけではなく、西医の知識について絶えず探っている。

如在《谦斋医学讲稿》中，他用地黄饮子治疗脊髓痨，黄芪建中汤治疗胃溃疡，丹参饮治疗心绞痛。

たとえば《謙齋医学講稿》の中では、彼は地黄飲子での治癒は脊髓癆を使い、黄耆建中湯での治癒は胃潰瘍を、丹参飲での治癒は狭心症をと。

他并且认为：溃疡病大多数位于胃或十二指肠，神经衰弱大都因大脑皮层兴奋抑制的不平衡所至，心绞痛以冠状动脉硬化者最为普遍，血液病必须通过周围血象和骨髓象检查才能确诊等。

彼はしかも思っている：潰瘍病の大多数は胃あるいは十二指腸に位置して、神経衰弱の都（すべて）は大脳皮質の興奮の抑える不釣り合いのため、狭心症は冠状動脈硬化症者で最も普遍的で、血液病は周囲の血液像と骨髓を通じて必ずそうして検査をして最終的に診断すると。

由此可见秦老的博学，不拘门户之量见，和好学精神。

これより分かるのは秦老師の博学、戸口にこだわらない量見、学びやすい精神を合わせ持つ。

秦老常说，一个人要“活到老，学到老”总感到“学不了”。

秦老師の常説は、一個人の要は“年老いてまで活動し、年老いてまで学ぶ”ことであり、総じて“学べない”と感じていると。

三、提倡中西医团结合作。

三、漢方と西洋医学の団結合作の提唱。

在《謙齋医学讲稿》中明确提出，“中西医团结合作是十分必要的，通过几年来的实践探深体会到党的方针政策是完全正确的”。

《謙齋医学讲稿》中は明確な提出をしている。“漢方と西洋医学の団結の恥じ入り、是れは十分に必要で、数年来の實踐を通じて探って深く党の方針と政策の是れが完全に正しいことを体得するであろう”と。

秦老通过谈“如何用中医治疗西医诊断的疾病”讨论了中西医结合问题。

秦老師は“どのように中医の治癒の西医の診断の疾病を使う”が中国医学と西洋医学の結合の問題を通じて討論する。

他首先向中医提出要求说：“中医治疗西医诊断的疾病，必须根据中医的理论进行辨证，西医读断可供参考”，中医在治疗上不依中医的理论去分析客观存在的脉证，便依据西医的诊断用中药，是肯定不合理的。

彼はまず中医に要求している：“中医の治癒の西医の診断の疾病、中医の理論によって必ず弁証を行わなければならない、西医は読んで参考に断じる”，中医は治癒で不依中医の理論上に分析の客観的存在の脈の証によって、便ち西医の診断によって漢方薬を使っている、是れは間違いなく不合理だ。

他还说，不能似是而非地去理解西医的一些术语，知之为知之，不知为不知，不要不懂装懂，要实事求是。

彼は、また言う。是に似て地にあらざることができずに西医のいくつか用語を理解して去り、知っていることため之れを知っていて、分からないで分からなくなって、詰めてわかることを知らなくないで、事実に基づいて真実を求めると言う。

例如，西医诊断为癌肿，便认为是毒瘤，即用攻毒、解毒的方法。

倒れた場合なら、西医の診断は癌腫と診て、便ち是れを毒瘤と認識し、すぐに毒を攻め、解毒方法を用いる。

其实，根据中医的辨证，扶正、活血、软坚等方法都是应当考虑的。

その実は、中医の弁証によって、扶正、活血、軟堅などの方法はすべて是れは考慮するべきだ。

有人一见炎症，便用银花连翘清热，岂不知活血、凉血、祛湿也是常用的方法。

ある人は炎症を見ると、便ち銀花、連翹の清熱を使う。どうして活血、涼血、去湿であるのを知らずして常用の方法であるのを知るのだろうか。

因此，中医治疗西医诊断的疾病最根本的方法，是要根据症状运用中医的理论去认真进行分析，辨证论治，只有这样才能取得更好的疗效，才能走向真正的中西医结合。

そのため、中医治癒の西医診断の疾病の最も根本的な方法、是れは症状によって中医の理論を運用し真剣に分析を行い、弁証論治し、もっと良い療効を得るこのような才能がだけあって、そうして真正の中国医学と西洋医学の結合に向かうことができる。

中医也应当努力学习西医方面的知识。

中医は努力して西医の方面の知識を学ぶべきだ。

他对西医也提出了希望。

彼は西医に対して望みを出した。

他说：“继承和发扬祖国医学，关键是西医学习中医”；“学习了中医的西医，已有两手本领，在使用中医方法治疗时，要切实地根据中医的理论辨证施治，经过临床观察，将效果好的加以分析，拿西医的诊断和治疗效果对照一下，这样不但能够确定中医疗效，说明问题，并为实验提供有价值的资料。”接着他说，在中西医结合过程中，已经西医诊断，就根据西医办事，如果不探讨中医理法，只想找到某些有效中药，也有废医存药的危险，对于继承和发扬祖国医学是不利的，对于中西医结合也是不利的。

彼は言う：“継承と発揚祖国の医学、肝心な是の西洋医(学)は中医を学ぶ”；“中医が西医を学んで、双方の本領がすでにあり、中医の方法の治癒を使う時、中医の理論の弁証施治によって適切にを要し、臨床観察を経て、効果を良いのを分析して、西医を持つ診断と治癒の効果を照らし合わせて、このように確定の中医の療効を取るだけではないのである。説明の問題、そして合わせて実に経験のために価値の資料を提供することがある。”中国医学と西洋医学の結合で過程で、すでに西医の診断、西医によってについて事进行处理して、探求しない中に医学上の理論法、ただいくつかの有効性の中薬だけを探し当てたくて、不用な医学に薬の危険を保存するようにも診られる、継承と発揚祖国の医学の是の不利のについて、中国医学と西洋医学の結合について不利だと受けて言う。

P.6

总之，秦老认为，中西医结合问题，必须提倡学习中西两法的理论，切忌“先人为主”或“对号入座”。

要するに、秦老師は、中国医学と西洋医学の結合の問題、必ず学習の中国と西洋の2法の理論を提唱しなければならず、“先人を主とする”あるいは“番号に合わせる”をぜひ避けねばならないと思っている。

中西医要互相参照，取长补短；对中医也好，西医也好，在理论上不能似是而非的去领会，在临床上更不能生搬硬套去乱用；应当中西医团结合作，用严肃、严密、严格的“三严”之科学态度，为中西医结合贡献出各自的力量。

漢方と西洋医学はお互いに参照して、長所を取り入れ短所を補う；中医に対して、西医、理論上、以て非である理解を去り、臨床上にて更に機械的にむやみに使うことを去る；中医と西洋医学の仲が良い協力、科学的な態度、之は厳肅、厳密、嚴格の“三嚴”を使って、中国医学と西洋医学の結合のために各自の力を貢献するべきである。

四、秦老的治学精神十分刻苦认真，对中医理论和经典著作的学习十分深入，对各家学说，了解广泛而透彻，在实际运用中灵活多变。

四、秦老師の研究する精神は非常に努力してまじめで、中医の理論と古典的著作の学習は非常に深入に対して、各家の学説に対し、調べるのは広範ではっきりしている、實際的に運用する中で柔軟によく変わる。

他善于独立思考，对理论、临床常有自己独到的见解，更能深入浅出的把难点、疑点剖析的一清二楚。

彼は独立思考に優れ、理論、臨床に対して自分の非常に優れている見解が常にあり、更に奥深いのがよく分かりやすいことができるのは難点、疑問点の分析する非常にはっきりしているからである。

他在《谦斋医学讲稿》里，讨论了很多理论问题。

彼は《謙齋医学講稿》の中で、多くの理論問題を討論した。

他说，在五行中火生土，在五脏生理上来说意思是心火生脾土，如果单纯讲心火生脾土似乎不易理解，只有结合临床才能迎刃而解。

彼は、五行の中で火は土を生み、五臓生理上で心火は脾土を生んみ、その結果、単に心火が脾土を生んで理解しにくいようだというならば、ただ臨床に結合をしてすらすらと解決できると言う。

譬如，治痰饮病的苓桂术甘汤和治水气凌心的苓桂枣甘汤二方中的桂枝其作用就是温心阳以助脾阳，这才是火生土的真正意义。

たとえば、痰飲の疾病を治療する苓桂朮甘湯が和するのは水気凌心の苓桂棗甘湯の2方中の桂枝の効果は心陽を温めて脾陽を助けるので、これこそ火生土の真正の意味である。

再如，临床常见肾阳虚或脾阳虚的“五更泻”，在治疗时用附子理中汤或四神丸，其作用是补肾阳（有人说是补命火）以生脾土，也应当理解为是火生土，所以这又说明火生土不能只拘泥于心火生脾土。

再び例えば、臨床の常見である腎陽虚あるいは脾陽虚の“五更瀉”は、治癒の時附子理中湯あるいは四神丸を使って、その効果は腎陽(ある人が是れが命火を補うと言う)を補って脾土を生み、是の火は土を生むになるべきで、だからこれはまた火生土がただこだわって心火で脾土を生むだけであることではないと説明する。

秦老对于火生土的分析就是如此精辟。

秦老師は火生土の分析についてこのように透徹している。

他也非常注意临床辨证用药。

彼はたいへん臨床弁証の用薬に注意する。

如头痛病一般多用川芎，但秦老认为，川芎辛温香窜，用不得当反多流弊，如头痛时胀闷兼有头皮麻木感觉者不宜用；尤其是血虚肝阳易升的患者不可用，用后往往引起眩晕。

頭痛の疾病と同じに川芎をよく使って、しかし秦老師は、川芎の辛温香竄、多い弊害に使えないことに反対して、頭痛のような時に脹悶の兼有の頭皮の感覚が麻痺している感覚者は使うべきでないと；特に血虚の肝陽は升の症例の不可なることをとりかえて使って、後でよく眩暈を引き起こすと思っている。

用量亦不宜太重。

用量もあまりに重くなるべきでない。

有人用川芎茶调散加减治外感头痛，处方恰当，但川芎用至三钱，服后反增头晕欲吐。

ある人は川芎茶調散で加減して外感の頭痛を治療し、処方は適切で、しかし川芎は三錢に至り用いると、服した後に反対に頭暈を増加し吐きたいと思ってしまう。

嗣后，秦老用原方去川芎，加钩藤二钱而愈。

その後、秦老師は原方から川芎に去って用い、釣藤の2錢を加え愈ゆ。

相反有人用辛散轻泄治外感头痛不愈，常有晕胀难忍时，他加入川芎一钱服后顿减。

相反のある人は辛散で軽く泄して癒らざる外感の頭痛を治療し、暈脹が常にあつて我慢しにくい時、川芎一錢を加へて服した後に頓減させる。

由此可见他用药灵活巧妙，值得我们临床之借鉴。

これより分かるのは彼の用薬は柔軟に巧みで、参考にすることこれが私達の臨床に値する。

在全书中共介绍了35个典型病例，其中如白血病的5个病例，举例均恰到好处，处方用药解决一病一症，也常有之，不必求全。

全書の中国共産党で35の典型的な症例を紹介し、その中は白血病の5つの症例のようだ、例を挙げて皆ほど良く、処方の用薬は1疾病の1病気を解決し、彼は之が常にあり、完全を求める必要はない。

对于7个腹泻的病例先后用了健脾利湿、清热化湿、理中加固涩、抑木扶土、温补肾阳、升阳益胃等六个治法，运用“同病异治”的法则，都取得了满意的疗效。

7つの下痢の症例について相前後して健脾利湿、清熱化湿、理中に固澀を加える、抑木扶土、温補腎陽、昇陽益胃などの6つの治法を使って、“同病異治”の法則を運用して、すべて満足する療効を得た。

这充分体现了中医辨证论治的优越性。

これは十分に中医の弁証論治の優位性を體現していた。

秦老对很多问题都有自己独特见解。

秦老師は多くの問題に対してすべて自分の独特な見解がある。

如他认为温病总的应区分为四项，

たとえば温病が全般的に4項目に区分している

(1) 病因：属于外感。

(1) 病因：外感に属する。

(2) 分类：风温、春温、冬温……等，但应以风温为主。

(2) 分類：風温、春温、冬温……等、しかし風温を主とする。

(3) 性质：属于热性，其特点具有三易，易化热、易伤阴、易动血。

(3) 性質：熱性に属して、その特点是三易があり、易化熱（化熱しやすい）、易傷陰（陰を傷りやすい）、易動血（血を動かしやすい）である。

(4) 传变：是以三焦、卫、气、营、血为纲进行传变的，又有顺传和逆传之别，但以顺传为主。

(4) 伝変：是れは三焦、衛、氣、榮、血を綱にして伝変を行って、また順伝と逆伝があり、ただ順伝を主とする。

所以他认为治疗温病应当抓住风温和传变途径为主。

いわゆる温病治療は風温と伝変の道を捉えて主とするべきことと思っている。

他又把“风温”分为：恶风期、化热期、入营期、伤阴期等四个时期来讨论，这一见解，非常值得我们深入研究。

彼はまた“風温”を分ける：悪風期、化熱期、入榮期、傷陰期等の4時期を討論する。この見解は、とても値打ちがあり我々は深く研究する。

值得提出的是，秦老在《漫谈处方用药》一文中说：处方是给药房配药用，药名、用量必须写得整齐清楚，不要潦草，简写的字应按《汉字简化方案》，不要随便杜撰。

提出の是れに値して、秦老師は《漫談処方用薬》1文の中で言う：処方の是れは薬局に調剤して使って、薬名、用量が必ず整然と書いていなければならないのは明らかで、ぞんざいにしないこと、簡略した書き方の字は《漢字簡化方案》にて案すべきで、気軽にいいかげんに作らないこと。

这样要求似乎苛刻，但可避免意外的差错事故。

このようにひどいようなことを求めるが、しかし意外な間違いの事故を免れることができる。

听了这段话，有人可能认为象秦老这样一位中医界能纵横古今的人，为什么津津有味的谈处方、药名、药量，甚至于写字等问题，似乎太琐碎，然而这正充分体现了秦老一丝不苟的治学精神。

この話を聞いて、ある人は恐らく1名の中で秦老師のこのような医学界の古今に縦横に走ることができる人に似ていると思って、どうして興味津々なのは処方、薬名、薬量を話して、甚だしきに至っては字を書いて問題、あまりにこまごまと煩わしいようで、しかしこれは十分に秦老師の少しもいい加減にしない研究する精神を体現している。

总之，《谦斋医学讲稿》是秦老学术思想的代表作，它凝结着秦老多年的心血，体现了他的主要学术成就，不但汇集了多年的经验，有很多精辟的论述，又有不少激励后学的肺腑之言，是留给我们的最可宝贵的财富。

要するに、《謙齋医学講稿》の秦老師の学術思想の代表的作品、その凝結秦老師の長年の心血、彼の主要な学術の業績を体現していて、集まった長年の経験だけではない、たくさんで透徹している論述があって、またたくさん言葉之後から勉強する心の奥底を激励することがあり、是れは私達のに最もとても貴重な財産を残しておくことである。